

2022年度

入学試験問題
(A日程午前)

国語

注意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん^{らん}に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」^{しゅうりょう}の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

雲雀丘学園中学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

甲町源太郎は空沢高校の入学式の日、木箱に捨てられていた子犬を拾ったことがきっかけで、三人しか部員のいなかったワンダーフォーゲル部（登山などをする部活）に入部する。部員たちは春合宿で張られていたテントでその犬を一晚預かってワンダーと名付け、今は部室にこっそり連れてきている。

ワンダーもこの環境に慣れてくれたらしい。粗相してあるのは困りものだったが、彼なりに部室内を探検したようだった。ゴミ箱代わりの段ボール箱には齧られた跡があったし、缶の寝床には部員が入れた覚えのない硬式テニスボールがあった。もとはテニスコートの近くで拾って失敬してきたものだったが、ワンダーが部室内で発見して自分のねぐらに持ち込んだらしい。

「噛んで遊んでたのかな？」

「抱いて寝てたんじゃねえか？」

「親犬の感触に似てるのかもしれないよ。表面が毛皮っぽいから」

源太郎の呟きに、ふと会話が途切れた。誰の胸にも、こいつも寂しいんだろかなあという感慨がよぎったのである。

まだまだ子犬の身だというのに、親元から離されたり捨てられたりと苦勞続きなのだ。――わけの分からない小部屋にひとりで閉じ込められた寂しさをテニスボールで紛らわしていたのかと思うとなんともいじらしく、源太郎はかすかな後ろめたさを覚えた。

こうしてワンゲル部室に落ちついていっているとはいえず、今後の見込みは立っていない。引き取り手は見つからないし、ここにいることが学校にばれたら保健所に突き出されて処分されてしまうかもしれないのだ。長々と説教してきた教頭の顔を思い出すと背すじが寒くなった。

「まあ、とにかく」三上部長がとりなすように言った。「俺たちでも、誰か引き取ってくれる人がいないか探してみようぜ」

「四人で探せば何とかなるかもしれないし」

「誰かしら見つかったら甲町の家で電話するってことにしようか」

角田先輩や滝先輩も協力を約束してくれた。それにお礼を言いながら、源太郎は口には出せないことにも気づいていた。

この話題になると、先輩たちの顔にもかすかに寂しげな表情が浮かぶ。――誰の胸にも、――という思いがあるのかもしれない。

放課後になると、ワンダーフォーゲル部は外周ランニングから練習を始める。

空沢高校の敷地の周りをぐるりと一周すると一キロ少々、距離があるので、部室で運動着に着替えてから走りに行くのだ。準備運動代わりにそれぞれのペースでランニングを終えたら再び部室に集まり、顧問の大地先生の指示を仰ぐのが習慣であった。

四人の部員たちはその時にワンダーのことを報告するつもりだった。しかしその日の先生はいつもより気が早かったらしい。部員たちがランニングから戻る頃には、部室の中でパイプ椅子に腰掛けて待ち構えていたのである。

その膝の上には、首輪を外されたワンダーがのっていた。

「一年坊主だけじゃなくて、こんな新入部員もいたとはなあ」

「あの、実はですね……」

説明しようとした源太郎の声を、ワンダーの甘え鳴きと悲鳴がかき消した。――みんなが帰ってきたのに喜んで駆け寄ろうとしたものだから、先生の膝から転げ落ちそうになったのだ。

大地先生はひよいと片手を伸ばし、すくい取るような手つきで子犬を救った。胸のあたりにしがみついたワンダーは、大きく伸び上がって先生の顎髭を舐めている。

「まあ、だいたい事情は分かるよ」先生はにやっと笑った。「俺だって昨日の入学式には出てたんだし、今朝は継ぎ接ぎだらけの新入部員が挨拶に来たわけでもないな」

部室の壁には釘が何本も打っており、源太郎の学生服の掛かったハンガーも吊るされている。昨晚源太郎の母が大急ぎで縫ってくれたものだった。

「こういう苦学生風の制服ってのも今時珍しいけど、個性的なのはいいことだよな」

「はあ、ありがとうございます」

「昨日は犬を抱えて入学式に出てた奴が、今朝は職員室に犬ぬきで来て、ワンゲルに入部するっていうだろ。こんなことじゃないかと思っ
見に来てみたんだ」

先生は片手をジャケットのポケットに入れ、部室の鍵を出してみせた。――部室の鍵は部長と顧問が一つずつ保管していて、戸締り後でも大地先生だけは入室が可能なのである。

「すいません」三上部長が謝った。「朝に言いそびれちゃったんですけど、昨日の夜にテントで預かったんです。その犬の行き場所がないってことだったんで」

「その代わりに入室させたってわけか。三上も策士だねえ」

「別に無理強いたわけじゃないですよ。甲町の方から入室希望だって言うから」

にやりと笑う顧問に、部長も笑顔で応じる。どうやら噂ほど怖い先生ではないようだった。

「それで、できたら今夜もここに泊めていただきたいと思ってまして……」

源太郎が I 切り出した。思案顔になった先生に向かって滝も口を開く。

「泊めるっていうか、部室で犬を飼うのはまずいですかね？」

動物慣れしていなかった彼も、一晚ワンダーと過ごすうちにすっかり犬が好きになっていたのであった。飼った経験がなかった分だけ余計に興味を湧いて、この部室で飼えたらいいのにと思っていたのである。

源太郎の顔がぼつと輝き、三上と角田も期待をこめて顧問を見る。――滝の言葉は、みんなが心の中で思っていたことだったのだ。しかし大地先生の方は渋い顔で腕を組んだ。

「どうだろうなあ」細めた目で子犬を眺め、それから部室を見回す。「俺も山小屋の番人してた時は野良犬を手なずけて飼ったもんだけど、学校の中ってのはなあ」

「ちゃんと自分たちで世話しますから」

「そう言われてもなあ」先生は首を捻った。「俺にはそういう許可を与える権限なんかないし、権限のある立場の人はまず反対するってのも予想はつくぞ」

「……………」

部員たちは顔を見合わせた。源太郎の脳裏に浮かんだのは堂本教頭の神経質そうな顔である。

「とにかく、今夜だけは見逃してもらえませんか」三上が言った。「甲町の家は犬が飼えないっていうし、ワンダーは泊まるところがないんです」

「ワンダー？」先生は犬と部長を見比べた。「この犬、ワンダーっていうのか」

「へへ、昨日命名したんです」角田が朗らかに言った。「ワンゲルっぽくていい名前ですよ」

⑥ 滝や三上や源太郎も先生に笑顔を向けた。どうにか先生をその気にさせようと、四人の部員が無言のうちに団結していた。

そんな気配を察してくれたのか、先生はやがて口を開いた。

「部室棟の管理は生徒の自主性に委ねるってのが学校側の建前だ」にやりと口元を歪め、部員たちを見回す。「俺だって部室の中のことまで口出しはしない方針だし、お前たちがうまいこと隠してたから、犬がいるなんてことは今だって気づいていない」

⑦ 他ならぬワンダーの頭を撫でつつ、とぼけた声で言つてのける。部員たちは思わず歓声を上げかけたが、先生はそれを制止するように片手を上げた。

「ただし、このままなし崩しに部室で飼っちゃまおうってのは感心しないな」

II

厳しい口調だった。「飼うなら飼うで、きちんとお偉いさんに話を通すんだ」

「話を通すというとは……」源太郎が尋ねた。「どうやればいいんでしょう？」

「そんなことまでは知らん」先生はきっぱり言った。「やり方は自分たちで考えろ」

椅子から立ち上がり、ワンダーを缶の寝床に移す。それで話は終わりだというように、今日の活動内容についての話題になった。

まずは体育館の隣にあるジムで筋力トレーニング、その後で合宿後の整理をかねて備品の確認。明日の入部説明会に持参する装備や資料は今日のうちにザックにパッキングしておき、ついでに新入部員の甲町にも使い方や何を教える。——そんなことを確認し終えると、先生はこれで帰ると言い出した。

「今日は四時から職員会議でな。後のことは任せた」

最後にワンダーを一撫でして部室を出ていこうとする。源太郎はその背中に声をかけた。

「職員会議で、ワンダーのことを頼んでいただくのは無理ですか？」

「分かってねえなあ」先生は首を振った。「俺に頼るんじゃないくて、やるならお前たち自身の力でやらなきゃ駄目だって言ってるんだ」

「……………」

そう言われても、源太郎には何をどうしていいのか分からない。先生にもそれは伝わっているようだったが、それでも甘い言葉はかけてもらえなかった。

「権利とか自由ってのは、誰かから貰うもんじゃない。闘って勝ち取るもんだ」

両手をジャケットのポケットに突っ込み、大地先生はわざと気障ぶって言った。その言葉を残し、のんびりとした大股で去っていったのである。

（竹内真『ワンダー・ドッグ』）

*継ぎ接ぎだらけの新入部員……源太郎が入学式当日に遅刻しそうになって自転車で急ぎ、自動車とぶつかってかすり傷だらけで登校したことを指している。

問一 ——線部①「源太郎はかすかな後ろめたさを覚えた」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア ばれないようにするために部室に連れてきたことで、ワンダーに心細い思いをさせてしまっているから。

イ 部室にテニスボールがあったことで、ワンダーに忘れていた親犬のぬくもりを思い出させてしまったから。

ウ 自分が親犬から引き離れたことで、ワンダーに人間と関わって恐い思いをさせてしまったから。

エ 部室に閉じこめたことで、ワンダーにひとりでも楽しく遊べることに気づかせてしまったから。

問二 ——線部②「三上部長がとりなすように言った」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 部長という立場から、ひとまずはワンダーの飼い主としての責任を負うべきだろうと思ったから。

イ 部長という立場から、ワンダーの飼い主を見つけてとにかく早く練習をはじめようと思ったから。

ウ 部長という立場から、飼い主探しを提案して気まづくなった空気をとにかく変えようと思ったから。

エ 部長という立場から、飼い主探しにあせっている部員たちをひとまず落ちつかせようと思ったから。

問三 ——線部③「誰の胸にも、（ ）という思いがある」とありますが、（ ）にはどのようなことばがあてはまりますか。二十字以内で考えて答えなさい。（ ）。「」は字数に数えます。

問四 ——線部④「こんなことじゃないかと思つて見に来てみたんだ」とありますが、それを説明した次の文の（ ）に入ることを十字以内で考えてあてはめ、文を完成させなさい。

もしかしたら（ ）かもしれないと思つて、見に来てみたということ。

問五 — 線部⑤「三上も策士だねえ」とありますが、それはどのようなことに対して言ったことばだと考えられますか。「策士」が「かけひきが上手な人」という意味であることをふまえて、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ワンダーを飼うかわりに、ワンダーを新入部員の一人としてむかえていたこと。
- イ ワンダーをテントで預かるかわりに、源太郎をクラブに入らせていたこと。
- ウ ワンダーを部室でかくまうかわりに、一人じめしてかわいがっていたこと。
- エ 源太郎を部員にするかわりに、ワンダーの飼い主を見つける約束をしていたこと。

問六 I・II にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア I あたふたと II ぴしやりと
- イ I おずおずと II ぴしやりと
- ウ I おろおろと II てきぱきと
- エ I あたふたと II きびきびと
- オ I おずおずと II てきぱきと

問七 — 線部⑥「滝や三上や源太郎も先生に笑顔を向けた」とありますが、それはどのような気持ちから生じた笑顔であったと考えられますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 先生がワンダーのことを気に入って、部室で飼うことに賛成してくれないかと期待している。
- イ 先生が犬を飼った経験があると知って、ワンダーのこともかわいがってくれるだろうと安心している。
- ウ 先生がワンダーの名前の付け方を聞き返したことに對して、恥ずかしく思っている。
- エ 先生にワンダーの名前が部にちなんだものと報告できたことを、得意げに思っている。

問八 — 線部⑦「他ならぬワンダーの頭を撫でつつ、とぼけた声で言っただけ」とありますが、ここから先生のどのような心情が読み取れますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 部員たちがワンダーを隠したいという気持ちはわかるし、実は自分も犬を飼いたいという気持ちがあるので、ワンダーのことがばれないようにしてあげようと思っっている。
- イ 部員たちがワンダーを隠したいという気持ちはわかるし、その気持ちを傷つけないためにも、部室に犬がいるという秘密をずっと共有していこうと思っっている。

ウ 部員たちがワンダーを隠したいという気持ちはわかるので、これから部室で犬を飼えるようにするために、職員会議で自分がきちんと話をつけてあげようと思っっている。

エ 部員たちがワンダーを隠したいという気持ちはわかるので、犬が部室にいることには気づいていないふりをして、今のところは見逃してあげようと思っっている。

問九 — 線部⑧「先生はきっぱり言った」とありますが、その時の先生の気持ちについて解答らんに続くように、四十字以内で説明しなさい。(、。。「」は字数に数えます。)

問十 本文全体に関して、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

- (1) 本文の表現上の特徴として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
 - ア 短文を連続させることで、物語の進行をスピーディーにしている。
 - イ 源太郎の視点で描くことで、主人公に存在感をあたえている。
 - ウ 擬音語や擬態語を多用して、場面を想像しやすくしている。
 - エ 会話文を通して、登場人物たちのそれぞれの性格を表わしている。
- (2) 本文に描かれている内容として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
 - ア 先生の、生徒たちを温かく見守ろうとする優しさだけでなく、生徒の前では格好をつけたがる姿が描かれている。
 - イ 生徒たちの穏やかで誠実な性格と、生徒たちの意見を聞き入れない先生の無責任な性格が対比されて描かれている。
 - ウ 困難に直面していても、同じ目的を持った仲間たちがワンダーのために助け合おうとする姿が描かれている。
 - エ 源太郎がワンダーだけでなく、先輩や先生にまでもふり回されて思い悩んでいる姿が描かれている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現代の日本語教育は、「文章を読む」ということと、「わかりやすい文章を書く」ということに、あまりにも偏りすぎていると、私は思います。

①日本は、文書の国です。役所でも会社でも、「書類の不備」を理由に突つかえされてしまうことがいくらでもあります。昔の日本人にとって、教育とは、「ちゃんとした文章を書けるようになること」でした。国語の授業が「文章を読む」に偏っているのは、「ちゃんとした文章を書くためには、その参考になる文章を知っていなければならぬ」ということがあるからでしょう。そして、文章というのは、昔は「むずかしいもの」と相場が決まっていました。「むずかしくなければなりや文章じゃやない」というへんな考え方が生まれて、その偏向は、第二次世界大戦以後の「民主化」の風潮の中ですこし見直されました。見直されたのはいいのですが、極端から極端に走るといふ日本人の悪いくせがあらわれて、そのうちに、「文章というものはわかりやすいものほどうい」になってしまいました。その結果、今の現代国語の教科書は、「わかりやすい文章を書くためにわかりやすい文章を読む」のオンパレードです。「わかりにくい文章」より「わかりやすい文章」がいいのはもちろんです。でも、そうなったとき問題になるのは、その文章を書いたり読んだりする、人間の「中身」なのです。

人間というのは、そんなに単純なものじゃありません。けっこう複雑なものです。その複雑な中身を持った人間が自分のことを書くんだとしたら、そうそういつも「わかりやすくかんたん」というわけにはいきません。複雑で、そんなにわかりやすくもない内容を書くんだとしたら、文章の方だつてそれに合わせて、「複雑でわかりやすい文章」になります。「わかりやすいもの」の方がいいにはきまっていますが、③そうそうなんでもわかりやすくすることなんてできないのです。

「かんたんな内容」を、「わかりにくく複雑で持って回った文章」にされたら困るでしょう。その代表的なのが、国会で政治家が読み上げる文章です。政治家たちは、話しているつもりで、じつは文章を読み上げていただけなのですが、あんなものはもつとわかりやすい表現にしてもらわないと困ります。「わかりにくいだけで中身がない」では困るのです。十年ほど前の日本には、「言語明晰、意味不明瞭」と言われた総理大臣がいましたが、最悪の日本語とは、そういうものです。

ところで、一番むずかしいのはなにかというと、「複雑な内容を持ったものをわかりやすく書く」ということです。これほどむずかしいことはありません。内容がわかりにくいものなら、その内容に引きずられて、文章の方だってわかりにくくなってしまいます。そこを引きずらずに、「ウーン」とうなりながら、他人のために表現をわかりやすくする——文章を書くうえで一番むずかしいことはこれです。「複雑なことをかんたんにわかりやすく書く」というのは、文章を書くうえで高等テクニクですが、「それができるようになるにはどうすればいいのか？」ということの答は一つです。「むずかしい内容」をこわがらず、「むずかしい内容を持った文章」に慣れる——これだけです。

④「消化のいいものばかり食べていたら、顎や歯や消化器の発達が遅れて、人間として問題の多い体になる」というのと同じです。古典をふくむ「むずかしい日本語」を国語教育の中から排除して、国語の授業がただ「わかりやすい」を中心にするだけだと、困ったことになるのです。

日本に生まれて日本に育った日本人にとって、日本語をしゃべるのは当たり前のことです。読むことだって書くことだって、そうそうむずかしいことじゃありません。ある程度の漢字を知ってしまえば、「もう自分はこれ以上の日本語を習う必要なんかはない」と思ってしまう。「わかりやすい」だけの国語教育は、こういう人間たちに、平気で「もう知っているからいい」と言わせてしまうのですね。

もう一つ、「今の人たちはあまり本を読まない」ということがあります。本を読まないからといって、そういう人たちが言葉を失って黙っているということはありません。しゃべりまくるテレビの影響もあって、本を読まない人たちは、逆におしゃべりになります。おしゃべりを当たり前にするようになってしまった人たちにとって、本に書いてある文章を読むというのは、かなりみだるっこしい行為なのです。

「本を読む」というのは、「黙って本を読む」です。その間はおしゃべりを禁止されます。しかも、本を読みなれない人にとって、本を読むというのは、かなり時間がかかるものです。読んで、そのことを自分の頭で理解できるようになるまでにはかなりの時間がかかって、それがめんどうくさい。だから、「そんなの口で言えよ！」という文句になってしまっているのですが、ところでしかし、どうしてそういうことが起こるかと言えば、それは、国語の時間に「の勉強」をしないからです。

「日本語の乱れ」はよく言われます。この「日本語の乱れ」は、ほとんど「話し言葉の乱れ」です。ひどい日本語を使う人たちは、まず文章なんて書きません。「文章を書け」と言われたら、とても窮屈にかしこまってしまうのが常です。「文章なんか書きたくないし、文章なんか関係ない」と思っている若い人たちが、自分たちの好き勝手にしゃべる言葉をそのまま文章にしたら、おそらくほとんどでもないものになります。が、なんでそうなるのかと言ったら、国語の時間に「日本語の話し方」を勉強しないからです。日本語の教育は「読む」と「書く」だけで、「話し方」なんてものではありません。「基本になる話し方」を知らないんですから、話し言葉がいくら乱れたって不思議はありません。

体に障害がなければ、「読み書きはできるけれども話すことはできない」ということは起こりません。人間の最初は「話す」です。ちゃんと話すことができていたら、その内容をちゃんと書くことだってできます。話はかんたんです。日本の国語教育が「読み書き専門」になっているのは、この前提を踏まえているからです。小学校に入ってくる子供は、誰だって「しゃべる」ということはできるのであります。ところが、人間というものは、途中で何度も成長して、変わるのです。いつまでも同じではありません。「昨日までのこと」に「今日」はもうあきています。人間は、いろんなことを経験して、複雑なことになっていく。だから、おしゃべりだった子供も、いつの間にか寡黙になるし、黙ってばかりいた子も、いつの間にかおしゃべりになっていくことがあります。この変化はなんで起こるのでしょうか？ それは、「話し方」に関係しているんですね。

おしゃべりだった子供がしゃべらなくなるのは、彼や彼女が「複雑な内容」を抱えてしまったからです。「しゃべりたくないわけじゃないけど、どうしゃべったらいいかわからない」——それで寡黙になる。おとなしかった子供がいつの間にかおしゃべりになるのは、その逆で、おとなしくしているうちに、「どうしゃべればいいのか」という方法をマスターしてしまったからです。成長する人間にとって、「話し方」の勉強だって、やっぱりその時その時で必要なんです。

「現代のおしゃべり」と「古典」というのは、全然関係ないと思っっている人は多いと思います。ところが、そうではないのです。「おしゃべり」とか「話し言葉」なんかとはまったく関係なくて無縁だと思われている「昔の古典」が、じつは「現代の言葉」と大きな関係を持っているのです。そういうことを忘れてしまっているから、話し言葉の混乱だって起こる。そんなことだってあるのです。

(橋本治『これで古典がよくわかる』)

問一——線部①「日本は、文書の国です」とありますが、それはどのような点に表れていますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 日本では、書類作成を重視した日本語教育をおこなっている点。
- イ 日本では、どこにおいても書類に正確さが求められている点。
- ウ 日本では、書類の文章の不備を探す力が必要とされている点。
- エ 日本では、むずかしい内容の書類があらゆる所にあふれている点。

問二——線部②「極端から極端に走る」とありますが、それは文章においてどのように変わるといいますか。次の文の(Ⅰ)・(Ⅱ)に入ることをそれぞれ十五字以内で考えてあげてはめ、文を完成させなさい。()、()「」は字数に数えます。

文章は(Ⅰ) (Ⅱ) という考え方から、(Ⅰ) (Ⅱ) という考え方に変わること。

問三 — 線部③ 「そうそうなんでもわかりやすくすることなんてできないのです」とありますが、それはなぜですか。二十五字以内で説明しなさい。(、。」「は字数に数えます。)

問四 — 線部④ 「消化のいいものばかり食べていたら」とありますが、それはどのようなことをたとえたものですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア むずかしい内容でも、理解しようとして表現に慣れるまで読み続けてばかりいたら、ということ。
- イ 容易な内容を、さらにわかりやすい内容に変えた文章ばかりを読んでいたら、ということ。
- ウ むずかしい内容の文章を、かみくだいた文章ばかりに変えて読んでいたら、ということ。
- エ 容易なことばで書かれた、わかりやすい内容の文章ばかりを読んでいたら、ということ。

問五 — 線部⑤ 「本を読まない人たちは、逆におしゃべりになります」とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 一人で黙ることになれていないために、かえって話せる時にはやたらと話し込んでしまうということ。
- イ 静かな時間を過ごす読書より、テレビでにぎやかにおしゃべりを楽しんでもしまうということ。
- ウ 面倒だと感じる読書ではなく、テレビの存在もあってよく話をするようになったということ。
- エ 話すことを禁止する読書より、テレビの方が十分にことばを学ぶことができるようになるということ。

問六 []にあてはまることばとして、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 話し言葉
- イ 黙読
- ウ 書き言葉
- エ 日本語

問七 — 線部⑥ 「日本の国語教育が『読み書き専門』になっている」とありますが、それはなぜですか。本文のことばを使って、二十字以内で説明しなさい。(、。」「は字数に数えます。)

問八 — 線部⑦ 『話し方』の勉強だつて、やっぱりその時その時で必要なんです」とありますが、それを説明した次の文の [I]・[II]にあてはまることばを本文からそれぞれ二字で書きぬきなさい。

人間は [I] の途中で様々な [II] をして変わり、その中で話し方も学んでいく。『複雑な内容』を抱えたために、その時々に合わせて正しい日本語の話し方を学ばなければならないということ。

問九 筆者は日本語について、どのような考えをもっているといえますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア おしゃべりが得意な現代人の特性をいやすには、教育現場では話し言葉で教えておしゃべりに親しむのがよい。
- イ 日本語の乱れをくいとめるためには、読み書き中心の日本語教育を徹底していかなければならない。
- ウ わかりやすい文章を書くためには、幼いころから心を豊かにする美しい文章をたくさん読むのがよい。
- エ 日本語で最も難解なことは、わかりにくく複雑な内容を他者に伝えるためにわかりやすく書くことである。
- オ 政治家の答弁がわかりにくいのは、戦後の日本語教育が曖昧なほうがよいとするものであったためである。

問十 []線部『おしゃべり』とか『話し言葉』なんかとは……大きな関係を持っているのです」とありますが、筆者は別のところで次のように述べています。Aの文章を読んで、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

A 標準語というのはとつても歴史の浅い言葉ですから、知らない間に「古くからの言葉」を、「もう使わない」と切り捨ててしまっているところがいくらでもあるのです。そうして、古典の言葉は「現代とは関係ない昔の言葉」になってしまふのです。が、方言には、いくらでも「昔のままの言葉」として残っていたりするんですね。

古典を暗唱して口の中に残しておくということは、そういう「標準語の中から消えてしまった言葉」と再会した時、「これはかつて生きて使われていた言葉だ」ということがピンとくるメリットがあります。「古典をわかる」ということは、本の活字の中に眠っているだけの言葉が、実は「生きて使われている言葉でもあった」ということを知ることなんです。古典をわかりたかつたら、それを暗記して「自分の口に移す」ということは、とつても有効です。「言葉に慣れる」というのは、そういうことなんですから。

(1) 「古典の言葉」が「現代の言葉」と大きな関係を持っているとわかるものを、Aの文章の中から二字で書きぬきなさい。

(2) 筆者は古典を暗唱することについてどのように考えていますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 古典の言葉を暗唱することで、本を通して文字の活字文化が今も継承されていることに気づくことができる。
- イ 古典の言葉を暗唱することで、現在話している言葉と変わらないものがあることに気づくことができる。
- ウ 古典の言葉を暗唱することで、標準語の特徴を知ってよりたくさんさんの言葉を習得することができる。
- エ 古典の言葉を暗唱することで、今は使われなくなった言葉でも使いこなせるようになることができる。

三 次の — 部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- | | | | | | |
|----|--------------|----|----------------|----|-----------------|
| 1 | 力士がドヒョウに上がる。 | 2 | 三日間家をルスにする。 | 3 | Hanson 部分を修理する。 |
| 4 | お年玉をチョコキンする。 | 5 | 種子がハツガする。 | 6 | ジョウシヤケン を購入する。 |
| 7 | ハンザイを未然に防ぐ。 | 8 | フンマツジュースを飲む。 | 9 | ハ克蘭カイで展示する。 |
| 10 | ブツカが小刻みに上がる。 | 11 | 政治家の コウエン を聞く。 | 12 | 競輪場に行く。 |
| 13 | 不燃ゴミを回収する。 | 14 | 学習の機会を設ける。 | 15 | 神仏を敬う。 |

問一
ア

問二
ウ

問三

つ	引き
て	取り
ほ	り
し	手
く	な
ない	ど
	見
	つか

問四
部屋に犬がいる

問五
イ

問六
イ

問七
ア

問八
エ

問九

あ	え	て	自	分	か	ら	は	口	出
し	せ	ず	に	突	き	放	し	、	部
員	た	ち	の	力	で	考	え	て	解
決	し	て	ほ	し	い				

という気持ち。

問十 (1)
エ

(2)
ウ

問一
イ

問二
I

む
ず
か
し
い
も
の
ほ
ど
い
い

II
わ
か
り
や
す
い
も
の
ほ
ど
い
い

問三
内容が複雑で、文章も複雑になっている。

問四
エ

問五
ウ

問六
ア

ま	う	か	ら	。
文	章	も	複	雑
に	な	っ	て	し

子	供	は	誰	で	も	話	す	こ	と
が	で	き	る	か	ら	。			

〈別解〉人は話すことが前提となっているから。

問八 I
成長

II
経験

問九
エ

問十 (1)
方言

(2)
イ

1	ドヒョウ	土俵	6	ジヨウシヤケン	乗車券	11	コウエン	講演
2	ルス	留守	7	ハンザイ	犯罪	12	競輪	けいりん
3	ハソン	破損	8	フンマツ	粉末	13	不燃	ふねん
4	チヨキン	貯金	9	ハ克蘭カイ	博覧会	14	設ける	もう(ける)
5	ハツガ	発芽	10	ブツカ	物価	15	敬う	うやま(う)

受験番号
得点